

ЦАРЬ-РЫБА

В. АСТАФЬЕВ



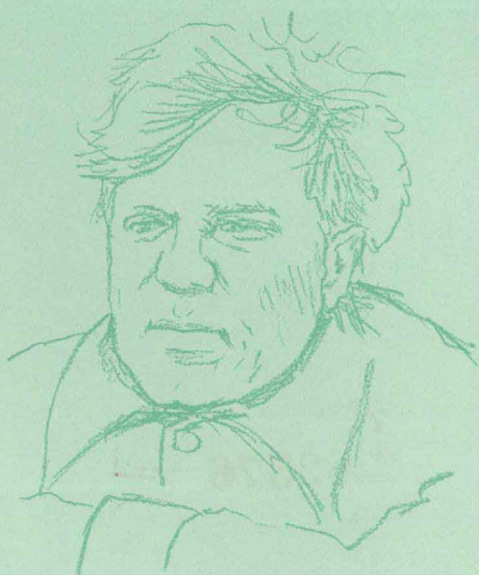
ГУНДЗОСЯ

ISBN4-905821-12-6

魚の王様〔上〕

ЦАРЬ-РЫБА

アスターフィエフ



群像社

訳者 中田 甫（なかだ・はじめ）

1917年愛知県に生まる。1938年ハルビン学院卒。

1942年—45年満洲国立大学ハルビン学院助教授。

敗戦後4年間ソ連に抑留。現在愛知大学教授。訳書、クラフツォフ編「口承文芸—ロシア」その他。

現代のロシア文学
魚の王様〔上〕 2

（上・下二巻）

一九八三年十一月二十日 初版発行 ©

定価 一八〇〇円

著者 アスターフィエフ

訳者 中田 甫

発行者 浅川彰三

発行所 株式会社 群像社

〒102 東京都千代田区平河町一—四—十二

振替 東京四—九五九四三

電話（〇三）二六四—〇三〇一

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

魚の王様

ア
ス
タ
ー
フ
ィ
エ
フ
著

中
田

甫
・
訳

装帧·山本美智代

目

次

魚の王様・第一部

249	223	191	161	127	93	55	7
解説Ⅱ中田 甫	黒い羽根が舞う	魚の王様	漁師グロホターロ	ちようざめ漁の穴場で	密漁者ダムカ	しずく	幻の犬
261	248	221	190	160	125	92	54

第

一

部

沈黙考し、我も、

不吉な生活の祭と

倉皇たる故里の相を、

馴狎の眼にて観照せり。

ニコライ・ルプツォフ

もし我々が至当に振舞うならば、我々も動植物も数千億年にわたって存在するであらう。太陽には燃料の大蓄積があり、しかもその消費はみごとに調整されているからである。

ハルロー・シャプリー

幻の犬

Foûe

こちらから好き好んでくへ帰るようなことはもうめったにしくなり、葬式や法事のために呼ばれることがしだいに多くなってきた。親類が多く、知友知己が多いのはすばらしいことだ、生涯のうちに多くの愛を得、与えることができるから。だがそれがすばらしいのは、身近な人に、古い林の老松が苦しげに折れ、長い吐息をもらしながら、倒れる時が訪れるまでのことだ……。

とはいえ、わたしも短い計報で呼び出されたわけでも、聴かされるのが泣き歌ばかりというわけでもないのにエニセイ河へ行くこともあった。ブイの火がかすかに揺れ、金色の星くずの滴を水底まで通している川の岸の焚火を囲んで仕合せな時間と夜とを過すこともあったのだ。波の音、風のざわめき、原生樹林^{イガ}のどよめきばかりではなく、大自然に囲まれた焚火の前に、独得の開けっぴろげの人びとのゆったりした話が聴ける。そうした話や新しい事柄や思い出が夜更けまで、たまには遙かな峠の彼方の空が静かに白む朝まで続く。なべてこともなく、べとつく靄も忍び寄らず、やがて言葉もゆっくりと重くなり、舌の回りもままならず、しだいに火も消え行き、自然のなかのすべてに、嬰兒^{みどりこ}のごとき清純な魂だけが聞こえるあの待望の静謐を手にするのだ。そんな時にはひとり自然と対面し、いくらか恐怖の混じる秘めやかな喜びをも感じるのだ。やっと、周りのすべてを信

じていい、いや信じなければならぬと感じ、露の下の木の葉か草のようにわれ知らず心和み、初めて日がさすまで、前夜から生き生きした温かさをたたえた夏の川辺で鳥が朝の羽ばたきをするまで、心軽やかにぐっすり寝込み、忘れて久しい気分口をほころばすのである——記憶にどんな重荷を背負わせることもなく、いや、己自身をも覚えていたのが精一杯で、ただ周りの世界を肌で感じ、目がそれに慣れ、たまにしかない心安らかなこの瞬間に己を感じているように、あの短い一枚の葉で生命の樹に固着しようとしていたあのころは、じつに自由気ままだったと。

しかし、もともと人間とは重たいものだ。生きていくかぎり、その心臓や頭脳はじつに不安そうに働いており、頭脳は本人の追憶の重荷ばかりか、人生の十字路で出くわし、荒れ騒ぐ渦巻へ永久に消え去った人や、心にまつわり付いてしまい、その痛みも喜びも自分の痛みや喜びからはがし取ることも引き分けることもすでにかなわぬ人への追憶までも吸収してしまっているのだ。

……当時はまだ勲功乗車券が有効で、戦時中にたまった賞与金を受領すると、わたしは極北の地からシム河畔に住むお婆さんを連れ出すためにイガルカへ向かった。

二人のおじ、ワーニャもワーシヤも戦死し、コースチャは北部地方で船乗りをしており、シムのお婆さんは港の商店長の家のお手伝いさんをしていた。その店長というのは親切な女の人だったが、子だくさんのためお婆さんは子供の世話でくたくたになり、わたしに手紙を書いて、この北の地から、よくしてもらってはいるけれど、このよそ様の家からなんとか救い出してほしいと頼んできたのである。

わたしはこの旅行にいろいろと胸を膨らませていた。だがこの旅で一番印象が深かったのはやはり、下船したその時イガルカではまたもやどこかが火事だったことであり、そこでわたしにはこんな感じがした。わたしはどこへも行かず、長い歳月は去りやらず、昔のままにその場で停止してお

り、あのおなじみの火事できえ、炎々と燃えさかっている町暮らしにはなんら変調もきたさず、仕事のリズムは乱れてもいないのだ、と。火事場の近くだけは人が群れて駆け回り、赤い自動車だけが唸りをあげ、ご当地の仕来たりによって、家や通りの間にある水溜りや小沼から水を吸み出しており、ある建物がパチパチと大きな音をたて、黒煙が巻き上がっていた。なんと驚いたことには、それは、シシムのお婆さんが住込みでお手伝いさんをしていた家と隣合った建物ではないか。夫婦とも不在で、シシムのお婆さんは泣きながらおろおろしていた。隣近所の人たちは万一に備え家財を部屋から搬出し始めたが、お婆さんにはそれができなかった。自分の家財じやあるまいし、失くしでもしたら大事だというわけで……。

急に足を止め、仕来たりどおりに、強く接吻を交わし、涙を流す間もあらばこそ、わたしは駆けつけて人様の家財をたばね始めた。だがしばらくして急にドアが開くと、敷居越しに肥った女が倒れ込み、四つん這いになって小戸棚にたどり着き、瓶からじかに鎮静剤のワレリアナ液をぐぐりと飲んでひと息つくと、弱々しく手を振って避難の準備はやるようにと合図した。表では気を鎮めるように半鐘が鳴っていた。燃える物は燃え尽き、お蔭様で隣家には延焼せずに済んだというわけ。ゆっくりと燃えさしに注水している見張りの車を一台残して消防車は立ち去った。火事場の周りには何にでも慣れ切った村人が黙りこくって立っており、煤だらけになった背の真っ直ぐな老婆だけが命拾いした横挽き鋸の把手を握りしめながら誰かに何かわめき散らしていた。

家の主が^{あるじ}仕事から帰ってきた。ペロルシア人の、丈夫そうな男で、その背丈と民族の割には、意外なほど気の利く顔と性格の持ち主だった。わたしはこの夫妻としこたま飲んだ。わたしは戦争の思ひ出に耽り、主はわたしの記章や勲章に目をやると、寂しげではあるが別段恨みつらみではなく、自分にも褒賞も官等もあったのだが、もう消えてなくなっちゃまったと言った。

あくる日は休みだった。わたしは家の主人とメドヴェージイ・ローク（熊盆地は
どの意）で薪造りをした。シシムのお婆さんは旅仕度をしながらぶつくさつぶやいていた。へこの婆あだけでは足りなくて、若いもんまでこき使うなんて！」と。だがわたしは喜んで薪造りをし、二人は冗談を言い合い、食事に行こうかと思っていた矢先、窪地の上にシシムのお婆さんが姿を見せ、まだ泣き足りないような目であちこち探してやっとわたしたちを見つけ出すと、枝につかまりながら覚束ない足どりで降りてきた。その後ろには天辺に八角楔のついた鳥打帽をかぶり縁飾りつきのズボンをはいたやせぎすの顔見知りの若者が不安げにのろのろと歩いていた。彼ははにかみながらも愛想よくわたしを見て笑った。シシムのお婆さんが淡々と言った。

「この子はあるたの弟だよ」

「コーリカ！」

まぎれもなく弟だった。まだあんよも覚えられぬくせしてもう大人が使う悪い言葉がしゃべれて、古いイガルカの芝居小屋の廃墟で二人ともあわや焼死というところまでいったことのあるあの弟だったのだ。

わたしが孤児院から家族の許に帰ってからもうやはりしっくりといかないものがあつた。確かに、うまくいくようこれ努め、いつときはおとなしく、親切にし、仕事をし、わが身ばかりか子供たちを抱えた継母までも養ったこともあつた。父はと言えば、相変わらず、一文残らず飲んでしまひ、放浪者の気ままな掟に従って、子供や家など顧みることなく、世間で暴れ回っていたのだ。

コーリカのほか、家族にはすでにトリーカもいた。だが三人目は、今様の歌ではないが欲すると欲せざるとにかかわらずへ行かねばならぬのだった。年齢の如何を問わず、とりわけ十七の年ではどこへでも好きなところへ行くというのは大変なことだ。少年はまだ大人にはなり切れず、自制

心もままならずといった岐路に立つ不安定な年ごろなのである。この年ごろになると若者も娘もとかく非行に走り、向う見ずな行動に出がちだ。

だがわたしは家を捨てた。永久に。〈避雷針〉にはなりたくないために。そこには遊び好きな父のむなしくしかも火のような全エネルギーが注ぎこまれ、それは年を追うごとに野性化し、継母の怒りのなかで抑えがたいものになっていたのだ。そこでわたしは去った。だがひそかに心にとめていた。おれにはともかくも両親が、とくに、子供、弟や妹たちが、コリーカの知らせではもう五人もいるということを。男三人に女二人だ。男の子は戦前の生まれだが、女の子のほうは、スターリンググラードで第三五師団麾下の四五口径砲隊長として戦った父が頭部負傷のため帰郷させられてからできたのだった。

わたしは弟や妹をひと目見たい気持ちに駆られた。なにを隠そう、父の姿をもやはり目にしたかったのだ。シムのお婆さんはため息をついて見送ってくれた。

「行くがいい、行くがいい……ともかく父さんだ。だがよく見ときな、あんなふうにならんように」

父は、スシコヴォ村に近い、イガルカから五十キロほど離れた地点の薪調達場で監督をしていた。わたしたちは古びた昔なじみの船ヘイガーレッツ号に乗っていた。煙をもくもくと吐き、鉄部はガタガタと音をたて、ぞんざいに針金で結びつけられた煙突は揺れに揺れ、いまにも崩れ落ちんばかり。ヘイガーレッツ号には艀から艀先まで魚のにおいが染み込んでおり、ウインチも錨も煙突も止索栓も一枚一枚の板も釘も、はては茸形のバルブを開けっぴろげにパタパタさせているエンジンさえもが、手のつけようもない魚の悪臭を漂わせていた。わたしはコリーカと船艙に積み上げてある柔かな白い網の上に寝そべっていた。板敷きと塩分で腐蝕した船底の間で、ぬるぬるした小魚

やらそのはらわで汚れた赤茶けた水がピシャピシャと音をたて、ときどきはね出し、ポンプの接合管が魚の鱗でつまった水を汲み出し切れず、船は方向を変えるとき横に傾いたきり、なんとか船体を立て直そうと懸命にうなり声をあげはするものの、ずっとそのまま進んで行った。わたしは弟の話に耳を傾けていた。だがわたしたちの家族のこととどんなニュースが語れるというのだ？ すべては昔のまま、だからもう弟の話は耳にも入らず、聞こえてくるのはエンジンや船の音で、やはりすでに少なからぬ時が流れ、わたしも成長し、たしかに、わたしがイガルカで目にし耳にした、また、スシコヴォへの途次目にし耳にしているすべてのものから、完全に別れてしまったのだということが、いまやっと分かってきたのだ。だがいまなおヘイガーレッツ号はごぼごぼと音をたて、船体を震わせ、老いさらばえた姿で慣れた仕事をやっとなさそうとしていた。わたしはこの臭気が鼻をつく小型船がじつに哀れに思われてならなかった。

わたしはスシコヴォへ向ったことを悔み出しはしたものの、低い川岸にぼつねんと立つ平べったいバラックのそばに、きれいに顔を剃り上げ、敏感にうごめく鼻の下にひげの跡のある、足の曲ったすでに白髪の人物を目にしたとき、胸が一杯になった。まこと、われわれの意志とはかわりなく胸の中に居すわっている感情を、いまだ何人たりとも打消し克服することはできないのだ。わたしよりも先に、心が父だと感じ取り認めたのだ！ 少し離れた緑の岸辺にすらりとした女性がスカートを若作りにあみだに被って立っていた。川の方へ、ぐったりして投錨してはいるものの依然風に散る黄良い砂を吹き上げながら穴という穴から煙を出している。ヘイガーレッツ号に向って、みすばらしいかっこうをした子供たちが一目散に駆け寄り、白い犬が吠えながらその後を追ってきた……。

わたしたちはスシコヴォへ電報は打たなかったし、また、打ったところで着きはしなかったであ

ろう。イガルカの学校へ入るためにやってきてそこで偶然わたしを見つけたコーリヤが、岸へ飛び出し、息を切らせ、タラップを指差しながら何度も大声で呼びかけていた。

「父さん！ 父さん！ 見ろよ、珍しい人を連れてきたぜ！」

父はその場で身の置き場もない様子だったが、不意に、若いころと変わらず軽やかに駆け寄ってくると、背伸びしてわたしを抱き、ぎこちなく接吻したが、これにはかなり面食らった。父が最後にわが子に口づけしたのは、白海運河大建設工事から帰ったおよそ十四年前のことだったからである。

「生きとったか！ ありがたい、生きとったか！」涙がほろほろと父の頬を伝った。「誰だか忘れちゃったが、そいつの手紙だったか、話だったかによると、お前は戦死したとやら、行方不明になったとやらとのことだったが……」

そうだったのか、へ戦死したとやら、行方不明とやらだって……ああ、父さん！ 父さん！

継母は依然岸辺で身じろぎもせずぼつねんと立ちつくしていたが、不安げな頭の動きがしだいに激しくなってきた。

わたしは歩み寄って母の頬に接吻した。

「あたしたちやね、行方が分からないと思うとったよ」と彼女は言ったが、悔んでいるのやら喜んでいるのやら分からなかった。

「ほくにゃ女房がいる。自分の家庭がある。ちょっと会いにきただけだよ」と、あわてて両親を安心させ、二人が、そしてわたしがほっとした気になると、わが身を責めた。へ失くしてもいないものを探してばかりいやがって、この間抜けめが……

人里離れた山奥の子供たちは、すぐにとまではいかなないものしだいになつき、一旦なついたら

くだんのごとくつきまとい、釣竿やら旧式の鉄砲やらを見せられたり、川や森へ引っぱって行かれたりした。コーリヤはわたしから一步も離れなかった。誰にも心から忠実になれる者は、身内には心の痛むほど心を捧げるものだ。弟にはポイエーという名の犬が影のごとく後をつけていた。ポイエーあるいはバイエーとは、エヴェンク(旧名ツン・グリスン)語で親しい友のことである。コーリヤはこの犬を我流にボヨーと呼んでいた。だから急いで何度も呼ぶと森の中ではひと続きになってへヨヨヨオオーと響き渡っていた。

エスキモー犬の一種で白くはあるがまるで灰まみれになったように前脚が灰色をしており、ひたいにも灰色の細い縞があり、見たところポイエーは欲深そうでない。この犬の美しさのすべてと賢さは、利口そうな落着いた、いつも物問いたげな、あのまだらの目にあった。だが犬が、とりわけエスキモー犬がどんなに利口そうな目をしてるかについては、すべて言い尽されているので改めて語る必要はない。北国の迷信だけを繰り返しておこう。犬は、犬になる前は人間、むろん、いい人間だった。このたわいもないが神聖な迷信は、スピッツやその血統ゆえにメダルをぶら下げている牛のように飼い太らされた図体の大きな犬にまで行きわたることは全くない。犬のうちにも人間と同様に、ただ飯を食らい、かみつく悪党、吠える奴、がりがり亡者どもが見受けられ、ここでは貴族階級は根絶されて存在しないから、それはただ愛玩犬の様相を呈していたにすぎなかった。

ポイエーは働きの者、しかもすなおな働きの者だった。主人自身は自分のほかには誰をも愛することができなかったのに、犬は主人を愛していた。人間に愛着を感じ、忠実な友となり協力者となるのが、天から与えられた犬の定めだったのである。

厳しい北ぐにの自然から生まれたポイエーはその忠実ぶりを行動で証拠だて、愛撫にはがまんがならず、働いてもご褒美は求めず、残飯やら人間が手に入れるのを手助けした魚や肉を食べ、年中